

活動報告書

報告者氏名: 高野 嘉裕

所属: 大分県立宇佐支援学校

記録日: 2014年 2月14日

【対象児(群)の情報】

・学年

高等部3年生

・障害名

知的障がい

・障害と困難の内容

本事例の対象生徒は高等部3年生の職業生活科の生徒であり、知的障がいを有する。卒業・就労を間近に控えた本生徒は一般就労も可能と思われる作業能力を持っているが、学習や作業において抵抗感を示すことが多く、また、どこか他人(特に担任)を頼る傾向にある。自分が行うことへの意欲を持っていないときには「寝る・他人にちょっかいをだす・目についたもので遊びだす」などの行為が始まる。これら行動の背景には年齢的なものや本人の性格的なものが原因であるという見立てが多かったが、学習などの様子を見ていると一概にそうであるとは言えない姿が見えてきた。自分が行っている計算の箇所をとらえることができなかつたり、本人が持っている言葉を文として書いて表出できなかつたりする姿が見られた。服装や体格、本人の性格などにより隠されている困難さをきちんと見極めることが必要であると思った。自身はスマートフォンを所持しており、SNSやメールなどを使いこなしながら、家族や兄弟、友達などとコミュニケーションをとることもできる。

【活動目的】

・当初のねらい

今年度の担当生徒は4名で、それぞれが職業生活科に在籍する単一障がいの生徒である。どの生徒においてもそれぞれの困難さを抱えており、iPadを用いることで生徒の生活や学習が豊かになったり、困難さが解消されたりするように思われた。事例研究を行うにあたり、生徒の困難さに対応した使い方を考えるべきであるが、iPadをどのように生徒に使用するか?というところがスタート地点になってしまったことは、今年度の一番の反省点である。自身の取り組みを見直し、再度生徒の実態把握を行っていくと、一人の生徒の抱えている困難さが気になり、活動を始めることになった。活動に当たっては、対象生徒は自身の携帯電話を所持しており、まずはその活用を行うことが第一と考えた。

生徒の生活に浸透している端末の活用を行うことは、その生徒の将来を考えたときに最も可能性のある支援ツールになりうると考えた。読み書きの困難さに対して携帯電話の基本的な機能(カメラ、メモ、漢字変換)を使うことから、生徒本人ができることを増やしていくことで、本人のやる気や自信を取り戻すきっかけにしたいと考えた。

・実施期間

2013年5月～2014年3月

・実施者

高野 嘉裕

・実施者と対象児の関係

担任



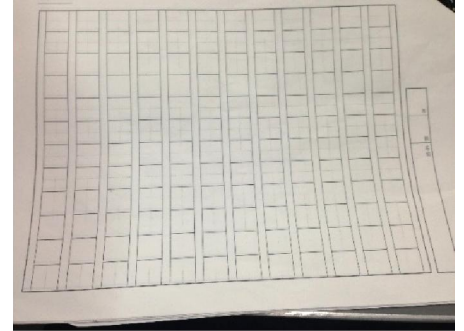
【活動内容と対象児(群)の変化】

・対象児(群)の事前の状況

本生徒の学習に対する抵抗感や意欲が持てないことは、思春期特有の年齢的なものによるものではないかとも考えたが、そのことが原因であれば担任との関わりにも同じような傾向が出てくると思われた。しかし対象生徒が見せる姿は全く反対の場面もあり、担任を頼り、一緒に作業や学習をすることを望むこと

県名はよめる？ 北海道 東北 信越・北陸

都道府県	読み仮名	読み仮名	読み仮名
北海道	ほっかいどう	ほっかいどう	ほっかいどう
青森	あおもり	あおもり	あおもり
岩手	いわて	いわて	いわて
宮城	みやぎ	みやぎ	みやぎ
秋田	あきた	あきた	あきた
山形	やまがた	やまがた	やまがた
福島	ふくしま	ふくしま	ふくしま
新潟	にいがた	にいがた	にいがた
富山	とやま	とやま	とやま
石川	いしかわ	いしかわ	いしかわ
福井	ふくい	ふくい	ふくい
山梨	やまなし	やまなし	やまなし
長野	ながの	ながの	ながの



夏期休暇中の宿題

左：手本もあり、視写する課題

右：夏休み中の思い出を書く課題（3枚全て白紙提出）

が多かった。このことから、原因として学習に対する読み・書きにおける困難さや見ともし・手順などの理解不足からくる自信のなさが考えられた。生徒の実態を細かく観察し、

把握することで生徒が抱えている困難さの本質が見えてくるのではないかと考え、取り組みを続けていく中で、長期休みの課題から、本人の困難さが顕著に出ているものが見つかった。手本などに従って書き取りの学習をする課題は全て終わっているのだが、その間に含まれている日記の課題はどれも白紙であった。この出来事や、日々の関わりの中で見えてきたことは、書くことの困難さであり、それに本人のプライドが関係しているということであった。

・活動の具体的内容

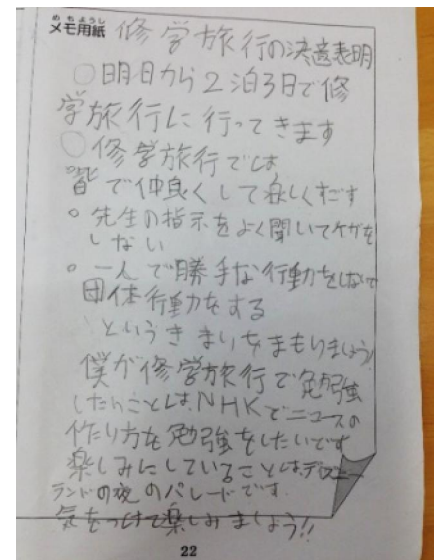
本人の抵抗感が顕著に表れていたのは文を考えて、その文を紙に書かなければならない時である。生徒自身は文章を考えることができ、自信の中にたくさんの思いを持っているが、それを表出することが難しいようであった。様子を見ていると漢字を書くときに手が止まることが多かった。そこで平仮名の使用なども含めながらアドバイスしてみたが、そのアドバイスもあまり受け入れる様子はなかった。そこには本人の「高校3年生」というプライドが見え隠れしていた。一通りの漢字を書きたいという思いを感じたため、本人が所持しているスマートフォンを使うことを勧め、メモアプリで漢字を調べる方法を伝えた。また、この時には基本的なルールとして学習に関係のない操作はしないことを約束して利用するように伝えた。



・対象児(群)の事後の変化

メモアプリで漢字を確認しながら書くことは、本人にとって自信となったようである。これまでは「めんどくさい」と言っていた作文にも取り組めるようになってきた。応援団長となり自身の組を紹介する文章を作成するときには、スマートフォンのメモアプリに家庭で浮かんだ言葉などを残しておくように伝えた。翌日になるとメモアプリにはいくつかの言葉や短文が記入されており、紹介文作成には一人で黙々と取り組むことができた。その後も自分のわからない漢字をメモアプリで調べて記入する姿が見られるようになってきた。修学旅行の際には、決意表明の係

に自ら立候補し、担任と相談しながら右の写真のような文章を書くことができた。



【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

今回の取り組みをとおして、端末使用の基本的な部分を再確認することができた。端末の使用はあくまで支援の方法の一つであり、それがすべてになることはないということである。端末ありきでの支援ではなく、子どもの困りに対して端末が有効に使えるものかということを考えることの大切さ。また今年度の担当生徒が高等部3年生ということから考えるに至ったが、将来を見通して生徒の身近なものとしての活用が可能か？なども含めて考えながら使用を検討していく必要があるとも感じた。

この事例では、対象生徒が自分自身の「字を書く」ということに自信が持てなかったことと、正しい文字を書くことができないという不安感に加え、生徒自身としての「漢字を使う」という高校生としてのプライドも原因の一つにあるということを感じることができた。本人が持っているプライドは非常に素晴らしいものであり、このことを大切にしながらの有効な支援として、誰しもが持っている端末を使ったということが、本人も気軽に取り組める要素になり、適切な支援となったのではないかと考える。

取り組み中には「情報モラル」という課題も出てきた。携帯電話によるSNS「Line」を使用して、不適切な画像をアップするなどのトラブルが起こった。有効なツールであるがゆえに、使う場所やタイミング、また使い方の基本的なモラルなどもCEC（一般財団法人 コンピュータ教育推進センター）の「ネット社会の歩き方」というアプリを使いながら伝えるようにした。端末を有効なツールとして活用するためには光の部分も影の部分も理解させ、適切な対応能力や回避能力を身に着けさせることも大切な点であると感じた。

・エビデンス(具体的数値など)

これまで、対象生徒にとって携帯電話は「連絡をとるツール」「写真を撮るツール」という認識しかなかった。校内での携帯電話の使用には決まりがあり制限される場面もあるが、文章を考える時、漢字を調べる時などに携帯電話を取り出す場面が増えてきたことは、生徒にとって自分の困難さを多少は補ってくれるツールとして認識されていると考えられると思う。

・その他エピソード(画像などを含めて)

今年度のもう一つの取り組みとして行ったことは、地域への啓発活動である。

教職員への啓発活動（校内）

大分県の取り組みもあり、校内でのタブレット使用者も少しずつ増えている。基本的な機能と数種類のアプリの紹介を行った。今後の課題は、どの先生でも気軽に使えるような環境と、気軽に使いたいと思ってもらえるような実践の紹介などを行う



教職員への啓発活動（校外）

宮崎県での啓発活動では、これまでの取り組みを中心としながら、タブレットで出きることの可能性について話をさせてもらった。導入される機体が未定な状態ではあったが、簡単に持ち運びができるタブレットの利点や「なぜiPadなのか」という



保護者への啓発活動

学校にタブレット端末が導入され始め、興味を持っている保護者が非常に多かった。また、すでに購入済みの方も多く、基本的な機能やアプリについての説明を行った。学校でどのような使い方がされているのかを知ってもらうことで、家庭からの協力



関係機関への啓発活動

この会でも、基本機能や最初に使えるようなアプリの紹介をした。福祉サービス（保育・児童デイサービスなど）などでも関心が高いということ感じられたが、やはり実践事例として模倣できるようなものが少ないということであった。魔法

